

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第16号
平成16年6月12日発行
発行所
〒424-0821
静岡市清水相生町6-17
静岡市観光協会清水支部内
TEL (0543) 54-2420
発行人 竹内 宏
題字
編集人 田口 英爾
印刷所 株ニシガイ
TEL (0543) 52-2188

海に向こうに広い世界が

次郎長の少年時代を考える。

幕末動乱の時代。次郎長が故郷を捨て、旅から旅へのアウトロウ人生に走ったのは何故か。彼の心の中に熟成され彼を駆り立てたものは何であつたろうか、その少年時代を探る。

旧清水市（平成十五年、合併により静岡市となる）の真ん中を南北に巴川が流れている。

川幅は七、八十メートル、勾配はほとんどなく、どぶ泥のように濁った川水が、満ち潮の時には上流へ逆流する。

次郎長は、文政三年（一八二〇）、廻船問屋が軒を連ねるこの川つぶちの港まちに生まれた。鎖国の扉をこじあげようとする外国船が日本の近海に出没し、文政の打払い令が出た頃だ。

次郎長が六歳の時、この狭い港まちを震撼させる出来事が起こった。中国寧波の貿易船得泰号が、遠州吉田港に漂着し、文政九年（一八二六）一月、修理のため清水港に回航されたのである。沖合に碇泊中の中国船は、シーボルトも目撃し、『江戸参府紀行』に書き留められている。千石船の二倍は優に超える巨大外国船の出現に、清水港近在の人

びとは驚き、争って見物に出かけた。まだ見たこともない異国船、上陸した中国人たち。幼い次郎長も、大人たちの背中越しに、海に向こうに広い世界があることを感じとつたにちがいない。

次郎長の生まれた家は代々三右衛門を名乗り、薪炭を商う旧家だ。屋号は薪三と称し、西伊豆との交易のために、船も所有している。次郎長の父親は、天候などお構いなしに船を出すので、「雲見ず」の三右衛門と異名をとる剛胆な船乗りであった。次郎長はその血を色濃く受け継いでいる。

兄一人、姉二人、四人兄弟の末っ子に生まれた次郎長は、数え五歳の時、叔父次郎八の養子となった。『東海遊俠伝』では、生まれてすぐ養子になったとされているが、清水市史編さん委員勝瀬光安遺稿「次郎長の出生と戸籍」によれば「明治二十年七月編成戸籍簿仮綴」の記載として「文政

河口付近の巴川（大正期）左手の遠方に梅蔭寺の幽霊松



七年五月」に「山本治郎右衛門養嗣子入籍」となっている。

養子となった次郎八の家は、代々治郎右衛門を名乗る米穀商甲田屋（次郎八は本名）であり、生家とは目と鼻の先、同じ美濃輪町の町内にある。

次郎長の本名は山本長五郎。治郎右衛門（次郎八）の所の長五郎をちぢめて、少年時代から「次郎長」と呼ばれた。ちなみに治郎右衛門の弟は太右衛門といって江尻宿で清水屋と看板を掲げる旅館を営んでいた。

武闘派の悪ガキ

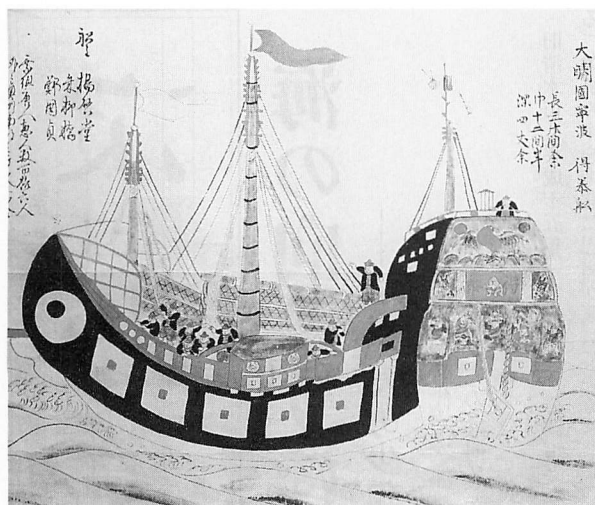
東海道と清水港は、江尻宿のはずれから枝分かれする「しみず道」で結ばれている。上一丁目、上二丁目、本町、袋町、新魚町、本魚町、仲町、美濃輪町の八ヶ町から成る清水町は、七百戸ばかりの家数のほぼ半分を、港まちらしく廻船問屋や船宿、荷役人足など港関係の仕事にたずさわる家で占めている。漁師の住居は百戸を数える。

次郎長が少年時代を過ごした米屋の甲田屋は、漁師の集落の真ただなにかにあった。漁師たちはその日その日の主食を甲田屋で求める。ザルを手にしたおかみさんらは、一升ばかり買い求めた米

文政九年（一八二六）清水港に入った中国船得泰号

大崎園筆 得泰号

長木向ふ
中二町半
深心文木



を、店の裏手にある井戸で洗って持ち帰る。代金は漁に出て魚がとれた時に払う。長屋の熊さんと大家のように、米屋と漁師は、一つのコミュニティとして固く結ばれている。甲田屋の跡取り息子である次郎長は、漁師の子供たちと真つ黒になつて遊んでいたのである。

「東海遊侠伝」には、七、八歳頃の次郎長は「最も闘撲を好み」とあり、喧嘩っ早い、武闘派の悪ガキだったと描かれている。その腕っぶしは「健腕乱打」して年上の者までやつつけ手下にしたともある。

悪ガキぶりは通っていた寺子屋でも遺憾なく発揮された。最初に入った村学先生の塾は終日喧嘩ばかりで退塾、二度目の禪叢寺の寺子屋ではいじめが過ぎて筆子たちから総スカンを食つてしまった。八歳の次郎長は考えた。腕っぶしだけでは世の中は渡れない。彼は自分の小遣い銭をはたいて駄菓子を買ひ、毎朝ふところに入れて皆に分け与えた。買取作戦である。力だけではない、というリーダーの資質が、こんなところにも芽をのぞかせている。

権現様の松

次郎長の家から百メートルぐらい離れたところに梅蔭寺という寺がある。実家の三右衛門の菩提寺で、寺の境内は近所の子どもの遊び場であつた。次郎長は悪ガキ仲間を誘つては、本堂の前の広場で相撲などに興じた。

墓地の周囲は、鬱蒼とした松林で囲まれている。中でもひととき背の高い一本の松が、あたりを見

おろすように聳え立っていた。その昔、徳川家康が駿府城から清水港の別荘に通う途中で目に掛けたとの記録（清見寺文書）もある。樹齢千年ともいわれる松は、清水港がまだ巴川の河口港だった時代には、入港する船の目印とされたと古老たちは伝えている。

少年時代の次郎長は、漁師の子どもたちといっしょになつて、権現様の松の根もとで遊んだ。大人が五人掛りで抱え切れないほどの巨木だから、子どもの手で登ることは不可能だ。次郎長は、いつの日かこの松に登つてやろうと考えたであらう。編集子も少年時代、せめて一番下の枝までとりつこうと試みたことがあるが、這い登ることは一歩もできなかった。その代わり、本堂の屋根には簡単に登ることができる。屋根瓦を伝わつて、本堂のてっぺんに立つと、もともと高台にあるこの寺から清水港を一望のもとに見渡すことができる。次郎長の生家はすぐ目の下だ。三保半島に抱かれた清水港の向こうに駿河湾が青く広がっている。少年時代の次郎長の脳裡にも、このような風景が焼き付けられたであらう。

七十四年の生涯を終えた次郎長は、家康にゆかりのこの松の根元にある墓に埋葬された。ちなみに、太平洋戦争中、この松は米軍の艦砲射撃の標的にされ、戦後間もなく松喰い虫によつて枯死し、今はその痕跡もない。

山田長政を尊敬

次郎長がアウトローの道に入つたのは、天保十三年（一八四二）、二十三歳の時であるが、その

きつかけとなったとされる有名なエピソードがある。『東海遊俠伝』を源とするそのエピソードは、「お前の寿命は二十五歳までだ」という人相見の宣告である。

はじめは気にも留めずにいたが、ある夜甲田屋に四人組の強盗が侵入し、これと格闘して次郎長は瀕死の重傷を負う。はっとこの時、「二十五歳までの命」との宣告が重く胸にのしかかった。賭博場への出入りは、この直後からはじまった。やがて殺傷事件を起こし、女房を離縁、甲田屋を姉夫婦に譲って無宿者となり、清水港を後にした。三河寺津（愛知県西尾市）を足場に斬った張った活躍をしていたアウトロー時代の次郎長は、時どきは清水港に帰っていた。

次郎長一家が、梅蔭寺住職安田和尚の振舞ったフグに当たった事件の起きたのは、万延元年（一八六〇）のことである。安田和尚は文政十二年（一八二九）の生れ、次郎長より九歳年下だが、大の仲良しで、次郎長を寺にかくまったり、『史記』や『水滸伝』など漢籍を手ほどきした。次郎長が漢字を読めなかったとするのは誤りで、ある時、子分が咸臨丸事件殉職者、壮士の墓の石欄に刻まれている「舊友建之」の文字を見て、「親分、これは何と書いてあるんだ」と尋ねたところ、次郎長は即座に、「旧友これを建つ、と読むんだ」と答えたという。

次郎長は亡くなる前年の明治二五年（一八九二）、静岡の駿府城内で大相撲興行を催した。目的は山田長政顕彰碑を建立するためである。次郎長は生涯を通じて山田長政を尊敬した。駿府に生まれた

長政は、江戸時代初期シャムに渡り、ヒーローとなった。その奉納した戦艦の絵図が静岡の浅間神社に残されている。幼い次郎長も両親に連れられて参詣し、山田長政の戦艦絵図を見たであろう。また拝殿の前には文化二年（一八〇五）に奉納された一对の手洗石があり、「駿河小早御極印船仲

春の次郎長史跡探訪ツアー・国立歴史民俗博物館

「民衆文化とつくられたヒーローたち」を見学／長田三則

平成十六年五月十一日、十二日にかけて、一泊二日のバスツアーで竹内会長始め三十八名が、千



市原市鶴舞公民館前、如水と次郎長碑にて

間」として、清水港の廻船問屋の名前が刻まれている。八丁櫓の快速船「駿河小早」の名は、次郎長の脳裡に、しっかりと焼き付けられたであろう。清水港を飛び出し、旅から旅に生きた次郎長の行動を支配したのは、海の向こうの広い世界を目指した「雄飛心」であつたらうと考える。（Ｔ）

葉県佐倉の歴博で開かれている「民衆文化とつくられたヒーローたち」の特別展示会の見学に行きました。

十一日午前八時半、観光協会前を出発、途中横浜の開港資料館で開港百五十周年記念の特別展を見学、アクアライン経由で木更津へ。木更津といえば歌舞伎で有名な「切られ与三の光明寺」唱歌でお馴染みの「狸ばやしの証誠寺」にお参りし、木更津温泉のホテル竜宮城に宿泊しました。

翌日は、市原市鶴舞公民館前に三年前に建立した「伏谷如水と清水次郎長の碑」に立ち寄り、「鶴舞藩を知る会」の内藤会長、塚原事務局長、伏谷氏ご子孫高石鶴子さん達と久しぶりに懇親を深めることができました。

佐倉の歴博には昼前に到着。今度の企画展の中心になった高橋敏教授は下田市の出身で、清水の地元から来ていただいたからと、わざわざロビーまでお出迎えくださり感激しました。次郎長の展示物は、梅蔭寺や鉄舟寺から多くの貴重な遺品や資料が出品され展示会に花を添えておりました。

今回のヒーロー達には、国定忠治、お隣の甲州黒駒勝蔵等も含まれ学術的に幅広く検証しようという企画でした。これらの人々は今まで浪曲・講談で知られた面が協調され、その実体は判らない部分が多かったと思いますが、これを学術的に解明していくという意図が伝わってきました。

ツアーにつきものの夜の懇親会は、即席の余興がとびだし賑やかに、また、和気あいあいと盛り

JIROCHO 観劇ツアーに参加して

天野 香

をのぞきながら、八丁目の博品館劇場に行く。

今年は、次郎長没後百年を記念して観劇ツアーが実施された。出演の正希光さんは、清水出身、しかも私の家とは余り遠くない所に住んでいたそうである。学校も岡小、二中卒業というから何処かですれ違っていたかもしれない。また、演出家の小林大祐さんは富士市出身であるが、高校は清水というからこれも縁がある。こんなに身近かの若者が、新しい次郎長に取り組んで「静岡市と合併して清水市は消えても、清水魂を舞台でアピールしたい」と意欲を燃やしていると聞き、興味深く観劇に参加した。

狭い舞台の幕が開き、現代風にアレンジした衣装で、歌や踊りで始まった。

スポットライトが当たり、チヨンマゲならぬ、ベッカム型の髪のでつぺんを青く染めた名高達男の次郎長が登場する。ミュージカル調に歌っている。そして庄野真代扮するお蝶さんの衣装も奇抜である。ちょっと驚いたが、これが現代の舞台である。正希さんは、次郎長一家と相対する都鳥一

家の影武者、蘭堂役をこなしている。背が高く、少しニヒルな感じだ。

サブタイトル「平成を斬る！舞う、歌う」とあるように、電子オルガンの生演奏で、舞台狭しと踊り、会場がわれるように盛り上がる。

都鳥の親分には大門正明、大政には小宮健吾、瓦版屋には福岡翼など、テレビでおなじみの顔が多く出演していて楽しくみることができた。

舞台が終り、エレベーター前のロビーに、名高さん、正希さん、演出の小林さんらが並びご挨拶をして下さった。名高さんと握手した私は、最高の気分で、この手をだいに、帰りのバスに揺られた。

編集室から

●昨年（平成十五年）秋、天田愚庵雲水姿の銅像が完成し、十一月十五日、いわき市で除幕式が行われた。編集子は当会を代表して式典に参加させていただいた。清水からの同行者は駿府日本平の里秋山社長と、清水郷土史研究会山田会長である。愚庵没後一〇〇年に今年（平成十六年）は当り、「愚庵と子規を語り継ぐ会」が四月二十九日に立ち上げられ、竹内宏当会会長が、その会長に要請され就任した。子規の句碑が建てられ、愚庵が贈った柿の木の子孫が移植された。

●竹内宏会長の近著「町おこしの経済学」が上梓されました。編集子が昨秋出版した「清水次郎長と明治維新」の紹介文を室伏尚美さんが書いて下さったが、スペースがないため次号に回すことになりました。室伏さんには深くお詫びします。（Ｔ）



後列右から二人目名高達雄、その左正希光。前列小林大祐。